

京都大学全学共通セミナー

第4回 生成文法の意義

生成文法の意義（文献1より）

従来までの言語観は、人間の「外」に存在する客体としての言語（**Externalized** 言語）を信じて疑わなかった。この「直接観察可能」な言語現象を対象を絞った構造主義言語学は、音韻現象を中心とする分類学的記述に終始し、その結果、一種の閉塞状態に陥って学問的命運がつきてしまった。

生成文法では、「言語」（**Internalized** 言語）という概念を、一貫して人間が心や脳の「内」にもっている言語能力という意味で捉えている。つまり、「言語」とは人間を離れては存在せず、「言語の本質」とは、あくまでも人間の心や脳の「内」にこそ存在する。その意味では、言語の研究は人間の脳の研究に他ならない。

生成文法の基本問題

- 1) I 言語の知識：言語を母国語として話せる能力
- 2) I 言語知識の獲得：外界からの適切な言語刺激（1次言語データ）は経験として必要不可欠である。しかし、この1次言語データの内容と獲得された言語知識の内容を吟味すると、前者に含まれない数多くの情報が後者に含まれている。

それは、**帰納 (induction)、演繹 (generalization)、類推 (analogy)** などの学習機構のみを用いて、1次言語データから学習できるとは考えられない。

それでは、どのような解釈が可能だろうか。

I 言語知識の獲得は、単に外界からの1次言語データに基づいて、**帰納・演繹・類推**などで学習されるのではなく、**子どもの脳に経験に先立って生得的に組み込まれている。**

つまり、言語規則の本質を、1次言語データに求めるのではなく、**遺伝的に決定している人間の脳の機能に求めるのである。**それがために、1次言語データの質が悪くとも、言語獲得過程がきわめて迅速に行われるのである。そして、そうした人間の脳機能は、人間に普遍的に存在する。それは、人間の他の器官が外界の刺激のもとに、**生得的な機能として成長していくのとまったく同じように、言語器官もそのように成長すると考えるべきである。**

言語機能の初期状態に対する理論を**普遍文法**、そして、獲得された I 言語に関する理論を**個別文法**、もしくは**文法**と呼ぶ。両者に違いは、同一言語機能に対する成長段階の相違である。**生成文法理論**の試みとは、さまざまな I 言語に関する**個別文法を構築する試みを通して、普遍文法を構成する**ことであった。

理論の 2 面性

- 1) 現象やメカニズムの**記述理論**
- 2) 現象やメカニズムが「なぜ」そうであるかの理由の**説明理論**

生成文法理論の場合

- ・個別言語に対する**個別文法**の構築は、上記 1) に対応。
- ・これに対して、脳の初期状態に対応した**普遍文法**の構築は、個別文法に対する理由の説明であり、上記 2) に対応。

しかし、普遍文法は、個別文法の**説明理論**にはなるが、言語機能が「なぜ」そのようになっているかという**説明理論**ではなく、**記述理論**にすぎない。

言語機能の**説明理論**構築に向けた大胆な試み

言語とは、概念－思考系と感覚－運動系を「最適な形」で結びつけている計算システムである。

数概念構築

発達心理学者ジャン・ピアジェ（1952）によると、数概念ができあがるには平均 7～8 歳の臨界期を超える必要があるという。それ以前の子どもは、1 歳から 6 歳までの間に毎年 1 つずつ新しい数を習得する。ところが、7～8 歳の臨界期を過ぎると、新しい数そのものを習得するのではなく、数を作り上げる操作が習得される。数概念を構成するのに必要な操作とは、1) 等価性、すなわち 1 対 1 に対応づけ（見かけの相違にかかわらずに保存される関係）、および 2) 差異性、すなわち単位の単純な反復（ $1 + 1 = 2$ 、 $2 + 1 = 3$ 、・・・）に基づく入れ子構造化による包含関係である。

この等価性と差異性からなる有限の操作によって、無限の自然数が構成でき

るという点は、ダーウィンが自然選択説を提唱する際に、有限の操作として遺伝的変異—すなわち、遺伝による保存性と突然変異による差異性—に着目することによって、無限とも思える生物種の多様性を再構成できることに気づいた点と相同の関係にある。

実際に、認識の個体発生として見られる子どもの数概念の構築をスケッチすると、次のように図式化できる。7～8歳の臨界期以前には、外的世界にバラバラに存在していた数が、臨界期以後に、包含関係によって1つの全体として内的構造化が起こると考えることができる。そのメタ認識は、先に指摘したように「外」に開いた構造から「内」に閉じた構造への相転移として捉えられる。

チョムスキーの説明理論

数概念の構築機能は、言語機能の副産物ではないか。実際に、分の長さは無限に長くできるし、言語の方が数よりも古くかつ普遍的に使用されているようである。したがって、数概念の構築には、言語同様に、生得的機能が働いている。

ユングおよびパウリの立場、そして村瀬の解釈

人間には、「集合的無意識」という生得的な心的構造がある。このようなイメージ形式には、内容はない。しかし、私たちが具体的な経験に出会うことによって、はじめてイメージとして意識される。つまり、どのような内容がイメージ形式から出来上がるかは、その時々時代の精神に左右されるばかりでなく、どのような素材に慣れ親しむかにも依存する。そのため、はじめはイメージがあることさえ気づかない。科学的発見がなされるのは、こうしたプロセスなのである。

村瀬雅俊 『講座・生命 Vol. 5』中村雄二郎・木村敏 監修 河合出版

参考図書

- 1) ノーム・チョムスキー『生成文法の企て』（福井直樹、辻子保子 訳）岩波書店（2003年）（インタビュー集）
- 2) ノーム・チョムスキー『言語と認知—心的存在としての言語—』（加藤泰彦、加藤ナツ子 訳）秀英書房（2004年）（日本での講演録）
- 3) ノーム・チョムスキー『文法の構造』（勇 康雄 訳）研究者（1963年）
- 4) ジョージ・カーロ、マーティン・シェラム『携帯電話—その電磁波は安全か』集英社（2001年）
- 5) B. Blake Levitt “Electromagnetic Fields: A consumer’s Guide to the Issues and How to Protect Ourselves” Harcourt Brace 1992